

国内発行の人文社会科学分野図書の巻末索引の現状と特徴

小山 憲 司*

The Current Situation and Characteristics of Book Indexes in the Humanities and Social Sciences in Japanese Book Publishing

KOYAMA Kenji

The purpose of this study is to clarify the current situation and characteristics of book indexes in Japanese book publishing and to examine research methods for book indexes. Of the 665 books in the field of society listed by Jinbunkai (the association of publishers for the humanities) in 2008, 556 books held by Chuo University Library were examined to determine whether they had book indexes. The conditions for the presence or absence of book indexes were analyzed in terms of subject field, number of pages, price, and publisher. The results indicated that approximately 60% of the books had a book index or more, suggesting that the availability of book indexes varied by subject field, number of pages, price, and publisher. These factors may have been influenced by the publishing policies of the publishers and the editorial policies of the editors. It is not possible to make a judgment based on this survey alone. In addition, the research methods remain an issue for further study.

キーワード：巻末索引，図書，日本，人文学，社会科学，書誌データ

【目次】

1. 問題の所在と関心
2. 先行研究
3. 調査方法
4. 調査結果
5. ディスカッション
6. おわりに

* 中央大学文学部教授

1. 問題の所在と関心

『出版指標年報』2019年版によれば、2018年に国内で発行された図書は71,661点であった¹⁾。このうち、最も多くを占めるのが文学で18.2%である。文学作品やコミックスは、一般に通読を予定して制作される。他方、特定の主張や意見、知識の伝達を目的とする図書は、通読されることもあれば、一部のみを参照されることもある。後者の類いの図書の多くは、その一冊の中に複数の主題を含むことが多い。図書の巻末索引（以下、索引）は、それらの所在をことばから効率的に検索する上で有効な手段の1つである。

筆者は、情報科学技術協会の分類／シソーラス／Indexing 部に所属し、活動している。同部会の最近の研究テーマの1つは、図書の索引の有効性である。その研究の一環として2019年5月に国立国会図書館書誌提供サービスNDL-Bib²⁾を用いて、2018年に国内で発行された図書の索引の有無を調査した（以下、2019年調査）。その結果、索引がある図書の割合は10.2%であった³⁾。一般に文学作品やコミックスには索引が付けられないことから、日本十進分類法（Nippon Decimal Classification, 以下NDC）の726.1および9類が付与された図書を除外して再度調査した⁴⁾。その結果、索引付き図書は全体の13.3%にとどまった。ここから2つの疑問が生じた。すなわち、①なぜ索引付きの図書の割合が低いのか、②索引付きの図書にはどのような特徴があるのかの2点である。

筆者は②に注目し、国内で発行される図書の索引の現状と特徴を検討するため、2019年調査のうち、索引付き図書が最も多く発行されていたNDC3類（社会科学）に該当する図書を対象に、さらに分析を進めた。当該分類の図書の中で、索引付き図書の割合は18.4%であった。ここから、索引付き図書を発行していた出版社上位10社を選択し、各出版社が発行した図書1,266冊を対象に索引の有無とその特徴を分析した。具体的には、主題分野、ページ数、価格、Cコードの4つの観点から索引の有無に傾向があるかを確認した。Cコードとは販売対象、発行形態、内容の3つからなる日本の出版業界独自の分類記号で⁵⁾、国際標準図書番号

1) 『出版指標年報』2019年版。全国出版協会出版科学研究所。2019、136-137頁。

2) NDL-Bibは、2020年12月28日にサービスを終了した。

3) 情報科学技術協会分類／シソーラス／Indexing 部会。「本の索引」は必要か?: その有効性と問題点を明らかにする。第16回情報プロフェッショナルシンポジウム、2019年7月4-5日、科学技術振興機構東京本部別館。

4) NDCの分類記号726.1は「漫画。劇画。風刺画」を表し、一般に漫画はここに分類されることが多い。また9類（900-999）は文学を表す分類記号である。

5) Cコードのうち、販売対象を表す記号には、0:一般、1:教養、2:実用、3:専門などの区分がある。「ISBNコード／日本図書コード／書籍JANコード利用の手引」。日本図書コード管理センター。2019、42-50頁。 <https://isbn.jpo.or.jp/doc/08.pdf> (参照2022-02-22)。

(International Standard Book Number, ISBN) と組み合わせて日本図書コードとなる。Cコードを用いた分析の結果、実用書への索引付与率は10.4%と低い一方、一般、教養、専門に該当する図書にはそれぞれ74.4%、85.4%、68.3%と比較的高い割合で索引が付与されていたことが明らかとなった⁶⁾。

そこで本研究では一般書、教養書、および専門書を対象に、索引の有無やその特徴を明らかにする。具体的には、これらの図書を多数刊行する出版社の団体である人文会が発行した基本図書リストに掲載された図書を対象に調査、分析する。

2. 先行研究

福永らは、東京大学総合図書館の開架閲覧室に排架されている図書を対象に、図書の索引の実態を調査した⁷⁾。具体的には、哲学、経済学、数学、建築学に分類された図書、合計748冊を選び、索引の有無や特性を調査、分析した。その結果、索引の付与率は全体で53.5%で、主題別では数学が最も高く81.3%、次いで経済学が57.1%、建築学が48.5%、哲学が41.0%であった。主題による違いに加え、出版社や判型、ページ数、翻訳書かどうかといった点からも索引の内容や形式に相違が見られたほか、形式的な不備があることも明らかになったという。福永らはまた、索引のレイアウトに注目した実態調査も行っている⁸⁾。

分類／シソーラス／Indexing 部会で共に活動する山崎は、2013年に刊行された社会、経済学、医学各分野の図書の索引の有無を調査している⁹⁾。調査は、国立国会図書館と米国議会図書館のOPACを用いて実施された。米国議会図書館のOPACで検索した結果、索引付きの図書は各分野いずれも約7割であった。一方、国立国会図書館のOPACで検索したところ、最も割合の高かった経済学でも48.1%と半数にとどまり、次いで医学26.7%、社会24.1%であった。山崎はまた、翻訳書にも着目し、追加調査している。その結果、経済分野の翻訳書10冊のうち、原書には索引があるのに翻訳書に索引が付いていない図書が5冊あることも確認されている。

同じく分類／シソーラス／Indexing 部会に所属する藤田は、料理本を対象に索引の実態を調査している¹⁰⁾。山崎と同様、国立国会図書館OPACと米国議会図書館OPACを用いて、2014年と2015年に刊行された料理本を検索した。その結果、国立国会図書館OPACで検索された

6) 小山憲司。「国内で発行される図書の巻末索引の現状と特徴」『第67回日本図書館情報学会研究大会発表論文集』日本図書館情報学会。2019、89-90頁。

7) 福永智子、海野敏、戸田慎一。「わが国の単行書巻末索引の実態」『書誌索引展望』14巻3号、1990、1-22頁。

8) 野末俊比古、福永智子、海野敏、戸田慎一。「わが国の単行書巻末索引のレイアウト」『書誌索引展望』16巻4号、1992、1-25頁。

9) 山崎久道著。『情報貧国ニッポン：課題と提言』日外アソシエーツ、2015、146-148頁。

10) 藤田節子。「料理本の巻末索引の調査分析」『情報の科学と技術』67巻2号、2017、82-88頁。

料理に関する図書 2,219 冊のうち、索引のある図書は 670 冊（30%）であった。他方、米国議会図書館 OPAC で調査した結果、ヒットした 1,939 件中 1,889 件（97%）に索引が付与されていた。

藤田はまた、索引作成の実態も調査している¹¹⁾。具体的には、学術出版社の編集者にアンケートおよびインタビュー調査を、学術書の著者である大学の教員にインタビュー調査を実施した。その結果、編集者、著者の両者とも索引の必要性を理解している一方、図書制作における時間的制約、索引作成のための技術や経験の不足などの課題を抱えていることを明らかにした。藤田はこれらの研究成果をきっかけとして、索引作成のための指南書『本の索引の作り方』も著している¹²⁾。このほか、索引作成技術に注目した研究として、阿部の質的研究もある¹³⁾。

これらの先行研究からは、①国内出版物における索引付与率は高くないこと、②主題分野や図書の性格によって索引の付与状況に違いがあること、③索引の実態は索引作成を担当する編集者や著者にも依拠することなどが明らかとなっている。本稿では、①を想定しつつ、②のうち図書の性格、すなわち索引が機能するであろう一般書、教養書、および専門書の索引の実態と特徴を明らかにすることを試みる。

3. 調査方法

本研究では、人文会が 2008 年に発行した『人文書の見取り図と基本図書』（人文書のすすめ、4）に掲載された図書のデータを用いて、索引の有無、および索引付き図書の特徴を明らかにする。

人文会は「人文書の普及と書店店頭における人文書の棚構築を目的」とした出版社の会で、2021 年 11 月現在、18 社が加盟している¹⁴⁾。人文会では 1993 年から 5 年ごとに「人文書のすすめ」と題した文献目録を発行してきた。2008 年に発行された 4 号『人文書の見取り図と基本図書』は冊子体のほか、「哲学・思想」「心理」「宗教」「歴史」「社会」「教育学」「現代の批評・評論」の分野ごとにウェブで図書情報が公開されている¹⁵⁾。本研究では、電子的な情報を利用できる本リストのうち、「社会」に掲載された図書 665 冊を調査対象とした。また、現物にあたって確認できるようにするため、これら 665 冊の図書が中央大学多摩キャンパス内の図書館で所蔵されているかどうかを OPAC を用いて確認した。その結果、556 冊が所蔵されていた。本研

11) 藤田節子。「図書の索引作成の現状：編集者と著者への調査結果から」『情報の科学と技術』68 巻 3 号、2018、135-140 頁。

12) 藤田節子著。『本の索引の作り方』地人書館、2019。

13) 阿部悦子。「人文科学、社会科学、科学・技術分野における巻末索引の質的な特徴」『四国大学紀要 (A)』14 号、2000、97-130 頁。

14) “人文会公式サイト”。人文会。https://jinbunkai.com/（参照 2022-02-22）。

15) “基本図書”。人文会。https://jinbunkai.com/基本図書/（参照 2022-02-22）。

究では、これら 556 冊を対象に 2 つの調査を実施した。

1 つは、現物にあたって索引の有無を確認するとともに、索引付き図書の特徴を出版年、主題分野、ページ数、価格、出版社の各観点から分析した。併せて、索引の種類も記録したほか、翻訳書の索引の有無、およびその原書に索引が付いているかどうかも確認した。もう 1 つは、国立国会図書館の OPAC でもある NDL オンラインを用いて、国立国会図書館が提供する書誌データに索引の存在が記述されているかを確認した。具体的には、各書誌データの注記に「索引あり」と記述されているかどうかを調査した。

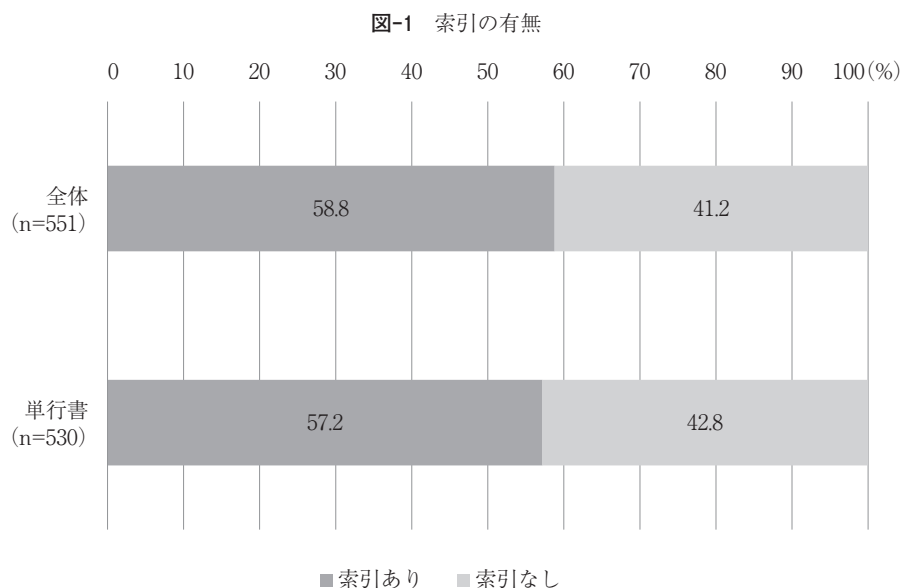
前者は 2021 年 9 月 8 日から 10 日に、後者は 9 月 2 日から 7 日にそれぞれ実施した。

4. 調査結果

4.1 索引の有無と特徴

(1) 全体

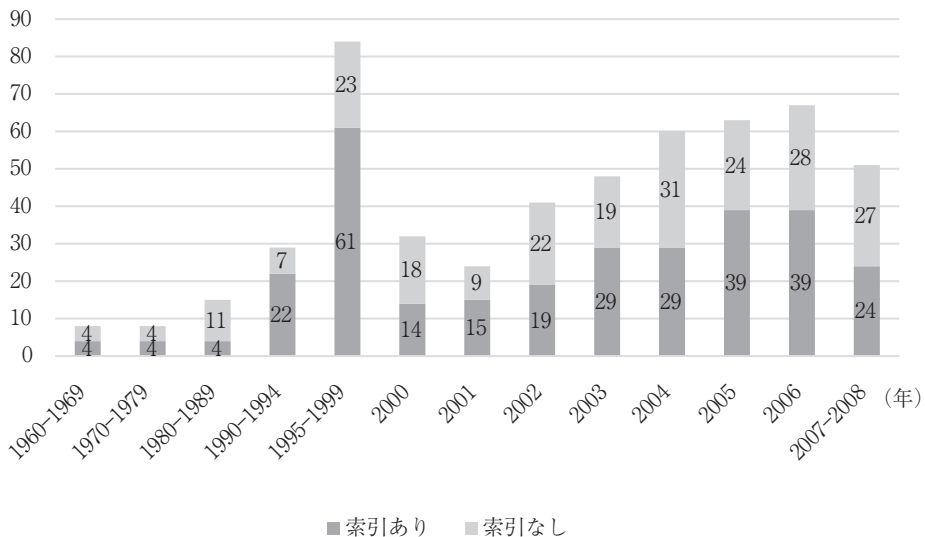
分析対象とした 556 冊のうち、貸出中、あるいは不明本等として調査中であった 5 冊を除く、551 冊を調査した結果、索引付きの図書は 324 冊（58.8%）であった。この中には辞典・事典類が 21 冊含まれていたことから、これらを除く単行書 530 冊を対象に分析を進めた。その結果、索引のある図書は 303 冊（57.2%）であった（図-1）。



(2) 出版年

図-2は、分析対象とした単行書 530 冊を出版年ごとに集計した結果である。索引付き図書の割合が最も高かったのは 1990 年から 1994 年に出版された図書で、29 冊中 22 冊 (75.9%) を占めた。次いで 1995 年から 1999 年の 84 冊中 61 冊 (72.6%) であった。一方、索引付き図書の割合が最も低かったのは 1980 年代刊行の図書で、15 冊中 4 冊 (26.7%) であった。各年によって多少の偏りはあるものの、索引付き図書の割合は、5 割から 6 割程度で推移している。

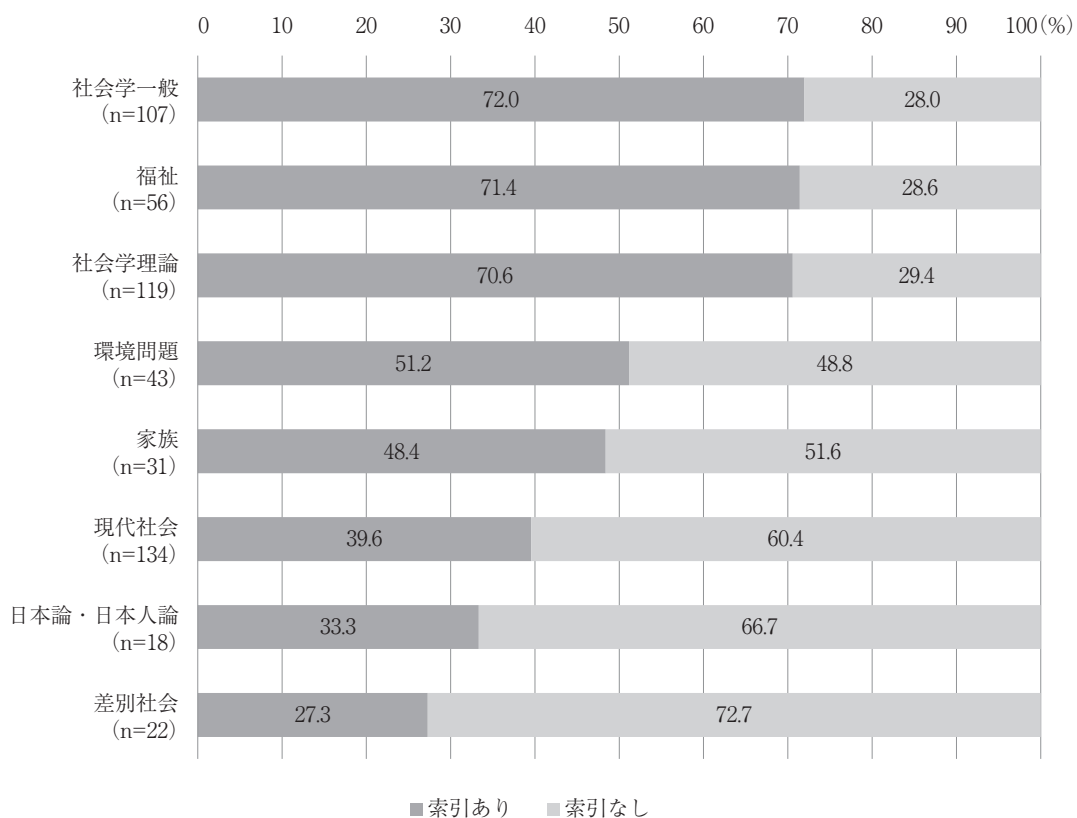
図-2 出版年別の索引付き図書の割合



(3) 主題分野

人文会が文献リストに掲載した図書は、社会学一般、社会学理論、家族、福祉、環境問題、差別社会、現代社会、日本論・日本人論の 8 分野に区分されている。これら 8 区分にしたがって、分野ごとに索引の有無を集計した。その結果、社会学一般、福祉、社会学理論の 3 分野では約 7 割の図書に索引が付いていたのに対し、環境問題および家族で約半数、現代社会、日本論・日本人論、差別社会では 3 割から 4 割程度と相対的にその割合が低かった (図-3)。

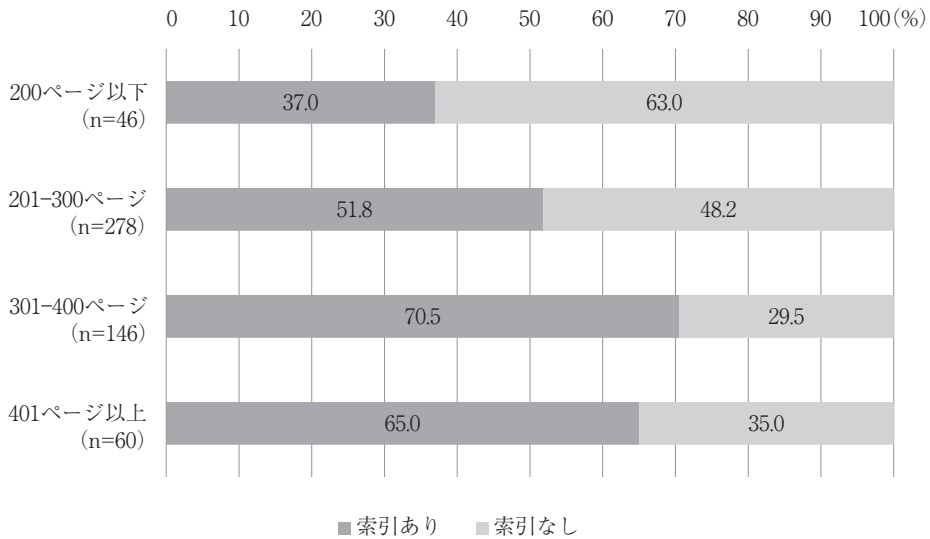
図-3 主題分野別の索引付き図書の割合



(4) ページ数

図書の本文ページ数に基づき、200ページ以下、201-300ページ、301-400ページ、401ページ以上の4つに区分して索引の有無を集計した。その結果、200ページ以下の図書（n=46）のうち索引付きは37.0%であった（図-4）。201-300ページ（n=278）は51.8%、301-400ページ（n=146）は70.5%、401ページ以上（n=60）は65.0%と、ページ数が増えるにつれ、その割合が高くなる傾向となった。

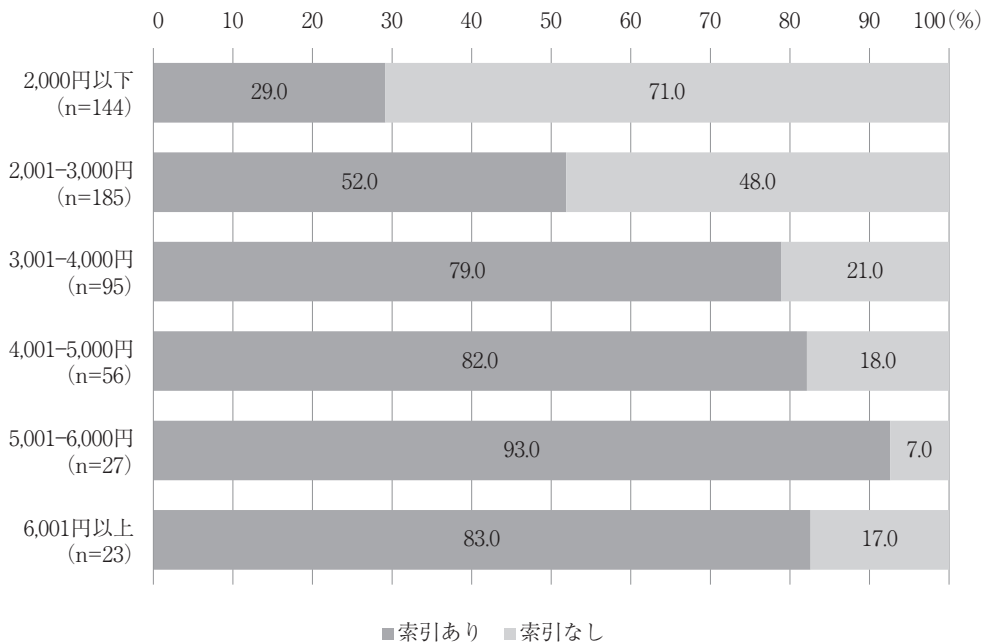
図-4 ページ数別の索引付き図書の割合



(5) 価 格

価格によって索引の有無に違いがあるかを分析するため、2,000円以下、2,001-3,000円、3,001-4,000円、4,001-5,000円、5,001-6,000円、6,001円以上の6つに分類して集計した。その結果、3,001円以上の図書では8割から9割程度の図書に索引が付いていた(図-5)。他方、2,000円

図-5 価格別の索引付き図書の割合

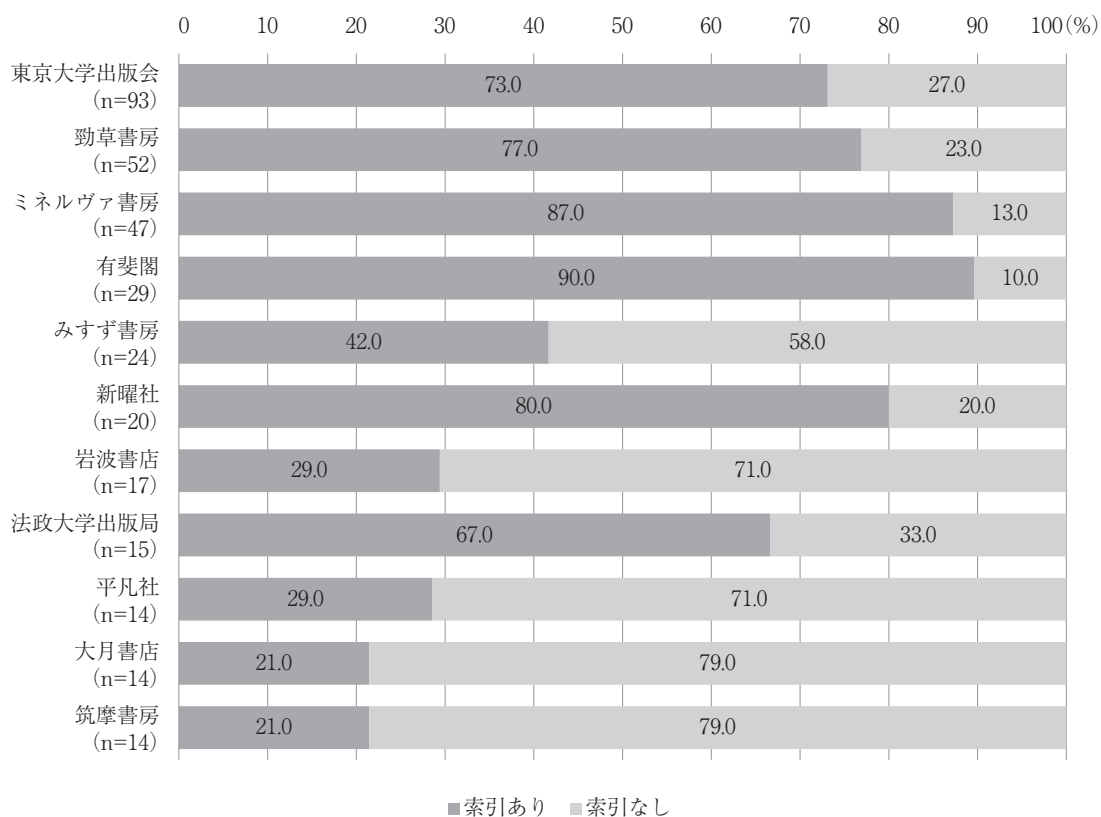


以下の図書の約7割，2,001円から3,000円の図書の約半数には索引がなかった。

(6) 出版社

掲載図書数上位10位にあたる11社の図書339冊を出版社ごとに集計した。その結果，東京大学出版会，勁草書房，ミネルヴァ書房，有斐閣，新曜社，法政大学出版局の6社は，索引付き図書を発行する割合が高かった。一方，みすず書房，岩波書店，平凡社，大月書店，筑摩書房は半数以下となった。索引付き図書を多く発行する出版社6社と索引付き図書が半数以下の出版社5社に明確にわかれた（図-6）。

図-6 出版社別の索引付き図書の割合



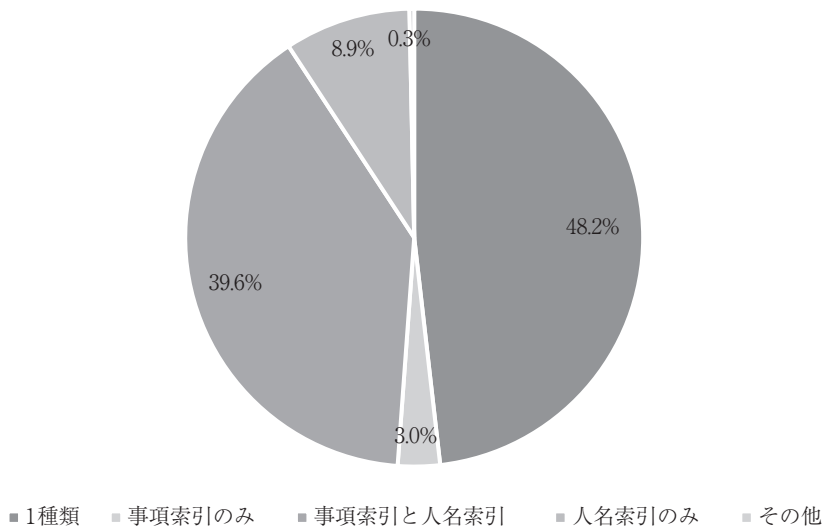
(7) 索引の数および種類

図書の索引には，特段の区別なく索引が1つ付与されているものもあれば，事項索引と人名索引のように，検索できることばの種類によって複数の索引を用意するものもある。索引の数および種類を確認したところ，索引が1つ付与されている図書は，146冊（48.2%）であった（図-7）。

他方、事項索引あるいは事項名索引という名称の付いた索引のみがある図書は 9 冊 (3.0%)、事項索引と人名索引の 2 種類からなるものは 120 冊 (39.6%)、人名索引のみのものが 27 冊 (8.9%)、その他が 1 冊 (0.3%) であった。ここでいう「その他」とは、いわゆることばから該当ページを探すための索引は付いておらず、地図索引のみであったものを指す。

このほか、図表索引や写真索引、地名索引、化学物質索引など、それぞれの図書に応じた索引が付いている事例も確認された。

図-7 索引の数および種類の割合



(8) 翻 訳 書

本研究で対象となった 303 冊のうち、翻訳書は 128 冊であった。このうち、索引のある図書は 83 冊 (64.8%)、索引のない図書は 45 冊 (35.2%) であった (表-1)。

山崎は原書に索引があるにもかかわらず、翻訳書から索引が省略されている例を指摘した¹⁶⁾。本研究でも同様の方法で調査したところ、原書に索引のある図書 93 冊のうち、翻訳書にも索引が付与されている図書は 69 冊 (74.2%) であった。一方、原書に索引があるにもかかわらず翻訳書には索引が付いていない図書は 24 冊 (25.8%) であった。

原書に元々、索引のない図書は 35 冊あった。このうち、21 冊の翻訳書にも索引は付いていなかった。他方、原書に索引がないにもかかわらず、翻訳書には索引が付けられている図書が 14 冊あった。著者や出版社が読者の利便性を考えて、翻訳書を 1 つの著作物、あるいは 1 つ

16) 山崎. 前掲書 9.

表-1 翻訳書および原書の索引の有無

	原書・索引あり	原書・索引なし	合計
翻訳書・索引あり	69	14	83
翻訳書・索引なし	24	21	45
合計	93	35	128

の作品として捉え、刊行時に索引が付与されたものと推察される。たとえば、この14冊の翻訳書の1冊『メッセージ分析の技法』の訳者である三上は、本書の凡例で「巻末の索引は、原書にはないものであるが、読者の便宜を考えて、訳者が独自に作成した。」と述べている¹⁷⁾。

4.2 書誌データとの比較

国立国会図書館が提供する書誌データから索引の存在が確認できるかどうかの手がかりを得るため、NDLオンラインを用いて調査した。具体的には、分析対象である530冊をNDLオンラインで検索し、各書誌データの注記に「索引あり」と記述されているかどうかを確認した。その結果、注記に「索引あり」と表記されていたものは9冊にとどまった。4.1(1)で示したとおり、530冊のうち、索引を持つ図書は303冊である。したがって、321冊は索引が付与されているにもかかわらず、NDLオンラインの書誌データからは索引の有無を確認できないことが明らかとなった。なお、この9冊にはいずれも索引があることを現物から確認できた。

5. ディスカッション

本研究は、国内で発行される図書の索引の有無、およびその特徴を明らかにすることが目的であった。2019年調査から、実用書の索引付与率は高くないが、一般書、教養書、専門書では比較的高い割合で索引が付与されていたことから、これらを研究対象とした。具体的には、一般書、教養書、専門書を多数刊行する出版社の団体である人文会が2008年に発行した基本図書リスト『人文書の見取り図と基本図書』のうち、「社会」に掲載された図書を対象に調査、分析した。

先行研究からは、①国内出版物における索引付与率は高くないこと、②主題分野や図書の性格によって索引の付与状況に違いがあること、③索引の実態は索引作成を担当する編集者や著者にも依拠することなどが明らかとなっていたことから、(1)図書の性格、すなわち索引が機能するであろう一般書、教養書、および専門書においても索引付与率は高くないのか、(2)索引の有無は図書の特徴と関連があるのかを検討した。加えて、(3)索引の有無をNDLオンラインを

17) クラウス・クリッペンドルフ著、三上俊治〔ほか〕訳、『メッセージ分析の技法：「内容分析」への招待』勁草書房、1989、ix頁。

用いて検証できるかどうかも調査した。

その結果、本研究で対象とした単行書 530 冊のうち、索引のあった図書は 57.2%にあたる 303 冊であった。福永らの調査結果よりも若干その割合が高いが、ほぼ同程度と言える。しかし、米国議会図書館 OPAC を用いて行われた山崎や藤田の調査結果と比較すると、大きな差があった。国内発行図書の索引付与は、それが有用であろう類いの図書であっても決して高いとは言えない実態であった。

次に、(2)の索引の有無に図書の特徴が関わっているかに関して、出版年、主題分野、ページ数、価格、出版社、索引の数および種類、翻訳書の 7 つの観点から集計し、分析を試みた。その結果、出版年では大きな差が見られない一方、主題分野、ページ数、価格、出版社の 4 つの観点においてはいくつかの特徴が見られた。

たとえば、主題分野では、社会学一般、福祉、社会学理論の 3 分野の約 7 割の図書に索引が付いていたのに対し、環境問題および家族で約半数、現代社会、日本論・日本人論、差別社会では 3 割から 4 割程度であった。ただし、これらは出版社という要素に関連するかもしれない。

掲載図書数上位 10 位にあたる 11 社の図書 339 冊を出版社ごとに集計したところ、東京大学出版会、勁草書房、ミネルヴァ書房、有斐閣、新曜社、法政大学出版局の 6 社は、索引付き図書を発行する割合が高かった。一方、みすず書房、岩波書店、平凡社、大月書店、筑摩書房の 5 社は半数以下であった。すべての出版社の出版物の傾向を分析していないので推測に過ぎないが、各出版社の編集方針が主題分野の結果と関係しているかもしれない。出版社による索引付与の有無は、福永らの研究でも指摘されている。

図書のページ数が多くなればなるほど、本文中に現れる主題の所在を探すのに、索引は重要なツールとなる。調査対象である図書を本文のページ数を参考に 200 ページ以下、201-300 ページ、301-400 ページ、401 ページ以上の 4 つに区分して調査、分析した結果、ページ数が増えるに連れ、索引付きの図書の割合が大きくなった。ただし、401 ページ以上の図書における索引付き図書の割合は 65.0%であり、301-400 ページの 70.5%に比べ 5 ポイントほど低い結果となった。なお、いずれも平均より高い値であることを指摘しておく。

また、図書の価格から 6 つに分類して分析した結果、3,001 円以上の図書では 8 割から 9 割程度の図書に索引が付いていた。他方、2,000 円以下の図書の約 7 割、2,001 円から 3,000 円の図書の約半数には索引がないことが確認された。図書の価格は、使用する紙の量など、モノとしての特徴からも大きく影響を受けるため、ページ数と類似の結果となった。ただし、想定される読者層の多寡が図書の値付けに反映されたり、翻訳書では著作権処理のための費用がかかったりすることも予想される。もちろん、索引作成を含む編集作業に相応のコストが必要になることも想定される。図書の価格による分析にあたっては、その決定プロセスにも留意する必要がある。

このほか、翻訳書における索引は、いくつかの要素が関わっていることが推察された。たと

えば、原書に索引があるにもかかわらず、翻訳書に索引のない図書が4分の1あった。索引は、読者をその図書の本文中に出現する主題に導くためのものである。したがって、翻訳書には翻訳書のための索引をつくる必要があり、原書の索引をそのまま翻訳すればよいわけではない¹⁸⁾。そのため、編集に手間や時間がかかったり、相応のコストが発生したりする。結果、出版社または翻訳者が索引を付与しないという方針をとることも十分あり得る。逆に、『メッセージ分析の技法』という図書の例のように、原書に索引がなくとも、読者の利便性を考え、翻訳者が積極的に翻訳書に索引を付与することもあった。翻訳書の索引の有無からは、出版社の出版方針や著者・翻訳者の姿勢など、多様な要素を考慮すべきことが確認される。

本研究のもう1つの目的である、(3)索引の有無をNDLオンラインを用いて検証できるかは、書誌データから索引が付与されていることを確認できたのが530冊中9冊(1.7%)であったことから、その可能性が低いことが明らかとなった。加えて、索引の種類をも調査するには、書誌データの注記に「索引あり」と記述されているだけでは不十分であるため、現物にあたる必要があることも確認できた。他のツールの利用可否も含め¹⁹⁾、索引の実態を把握する手法を今後も検討していきたい。

6. おわりに

本研究は、国内発行図書の索引付与状況とその特徴を明らかにするとともに、その調査手法を検討することが目的であった。調査対象として、人文会が2008年に発行した『人文書の見取り図と基本図書』を用いたが、「社会」分野に該当する図書のみを利用したため、他分野の状況は把握できなかった。また、人文会に参加していない出版社の事情も本調査手法からは明らかにできない。図書の性格を把握することも含め、調査対象をどのように設定し、データを収集、整理していくかが大きな課題の1つである。

他方、索引の有無は、出版年や主題分野、ページ数、価格、出版社、翻訳書であるかどうかなどの外形的な観点からのみで判断することが難しいことも確認された。なぜこの図書には索引が付いているのか、逆になぜこちらには付いていないのかは、出版社の出版方針や編集者の編集方針、著者・翻訳者の姿勢なども影響しているであろう。藤田の研究のように、編集者や著者への聞き取りなどの手法も組み合わせた多面的な調査が求められる。これらは今後の課題としたい。

18) 筆者が翻訳にかかわった図書『ビッグデータ・リトルデータ・ノーデータ』（勁草書房、2017）は、原書に索引が付いていたが、翻訳書の索引は日本語本文を参照しながら独自に作成した。

19) 2019年10月に実践女子大学の伊藤民雄氏から、図書館流通センター（TRC）の書誌データであるTRC-MARCの利用可能性を助言いただいた。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、進めることができていない。伊藤氏にはこの場を借りてお礼申し上げたい。

